



隨筆

本卦還りを果たして

総合南東北病院 柿沼雄二



高校時代の文化祭のタイトルは、創立100周年に向かう時だったので、「一世紀に駆ける」だった。100というのは、言うまでもなく、大きな節目であり、大きな祝い事であろう。人間でも100歳まで生きると、まさに「百寿」として大きな慶事だ。

「百」から思い浮かぶこと。「お百姓さん」。その本来の意味は、百の姓、すなわち百の名字を持つという意で、つまり、いろいろな仕事ができる人、という意味であったと記憶している。尊称と思う。

昔の農家では、田んぼをするなら畑も、空いている時間は漁へ、冬は縄を、という具合に、絶えず頭の下がるような幅広い勤労があった。自然相手の農は、天災も受けやすいために、百姓の二文字には、自然のリスクを分散しようという思索が含有されていたのだと思う。そのように、農業とは、以前から、実に裾野の広い尊き総合産業であったのだと思う。

「100」。かように数多のこと。三つ子の魂百まで。百害あって一利なし。彼を知り己を知れば百戦殆うからず。それに加えて、我が実感こもる言葉として、酒は百薬の長。

今回、郡山医師会報が99号との由。100号まで、あと1。先達の叡智や、会報に携わってきたかたたちの尽瘁に、頭の下がる思いがする。私ごとき輩の拙稿も、91号から連続して掲載していただいている。99号にも駄文を投稿しては、会の末席を汚すような思いがして、誠に恥じ入るばかりだが、ここに心からなる尊崇と感謝と讃仰の念を記さずにいられない。これから、さらに、「100」に向けて駆ける時となろうか。

99は、古典の次百(つぐもも)。99歳の祝いは「白

寿」というが、漢字の百から一を取り除くと「白」という字になることから来ているとの由。

99から、Totoの名バラードと言われる「99」を思い出して聴いてみた。これは、ジョージルーカス監督の映画にインスピレーションを受けて作った曲らしく、この99は女性のコードネームのことなのどうか。映画は、名前が数字に置き換えられた将来を描いていて、人類がコンピューターに支配された地下世界が舞台とのこと。AIの開発で、総理大臣の生成AI偽動画まで作られてしまう現代からしたら、すでに警鐘を鳴らしていた作品だったかとさえ思う。誹謗中傷メールなど、後々まで良くないものも残る今、活字は、その人の人生よりも長く生きることを肝に銘じ、この時を生きる者として、自省と反省を繰り返し、何か清廉なものを残したくも思う。

私事ながら、昨年、還暦を迎えた。何はともあれ、心から感謝すべきこと。クラス会、同期会、花盛り。勝手ながら、還暦ともなれば、嫌いな人とは無理には付き合わず、付き合いは制限しようと思え思ったものの、さにあらずで、ますます出会い豊かで、ますます人脈が広がる。我が周囲に人傑多数。

華年。この時ゆえに、私も、才長けた人材になろうと思うが、自分など、まだまだ「高齢者」の「新人」に過ぎない。長嶋監督が、還暦を迎えた時に、その心境を訊かれて「なにぶん、初めてのことなので」と答えていたことも思い出す。人生100年時代とも言われる今、百寿はまだまだ先のこと。さらになお日々を大事に、いつまでも、初乗りの航海者のような気持ちでいたいと思うこともある。

信長が好んだという「幸若舞」の一つ、「敦盛」。「人間五十年、下天のうちを比ぶれば」。その昔、人生は50年と考えられていた。信長は、夢幻のような儚き生に、何を成すべきか、自らに問うていたのだろう。それゆえに、並外れた行動力を持ち得て、天下統一に大きく前進できたのだろうと思う。信長に学ぶ。時間の有限性に思い至ると、生き方も賢明になろう。医学に大いなる進歩があることを知る一方で、なお終わりがあっても悟ることで、真に大事なものが見えてきそうだ。本来、時は、万人に公平に与えられるべきものだが、還暦での声かけで、すでに物故者となっている同輩の存在を知り、痛切な哀惜を禁じ得ない。

本卦還りを迎えた。「本卦還りの三つ子」と言われるごとく、歳をとり還暦を迎えて子供のようになることだと言う。多くの同級生たちも、なお闊達で、少年の心も持ち合わせているゆえに、多くの知的啓発を受ける。

人生を振り返ると、全般に健康でいられ、多くの出会いにも恵まれて、今、生あることに、深甚なる感謝を抱く。生まれてきたら、良き両親と祖父母が居て、市内の高校で優れた畏友たちに出会い、20代で登山に出会い、30歳で医師になり家内と結婚をして、40代にかけて外科医として職責に専心し、50代で健診・ドック業務に従事した。国立郡山病院では、世の嵐の前に立ちはだかつてくれた上司との出会い。どの場にも、良き友や仲間が居て、良き環境に恵まれた。交わす言葉は少なくとも、万人の長所を見抜く力のある先輩がいて、他方、短所だけを探り当てて問題にする職場もあった。ただ、多くの慈愛や熱意や湧活や救済や加勢を与え合って、かように健康で還暦を迎えられたことに、改めて、しみじみと謙虚に明朝に、万謝の念を新たにす。

還暦を迎えたからと言って、特段に変わることはないが、若作りではなく、若々しくいたいと思う。やがては、できなくなることも増えて、自己肯定感や万能感は薄れるのかも知れないが、誰かの言葉にあるように、顔に皺が増えても、心に皺が増えないように。心身共に赤子に戻って再起動だ。きっと、人生そのものが、壮大な実験の舞台。新しい体験を積んで、前頭葉を活発に。「60の手習い」よろしく、やがては、現代のお百姓さんのように、むしろ、できることが増えるように、と願う。

後にも先にも、この歳しかない時に、随筆集・還暦記念号を自費出版して、福島県立図書館の蔵書としていただいたのは、この時の記念と恐悦。物心ついた時から、書物は、命を持った生き物のごとく、自分の人生を共に生きるパートナーであった。我が随筆集は、所詮は駄文拙稿集に過ぎぬが、本は人間よりも長く生きる。だから、私がそうしてもらったように、この先、我が書が、誰かの人生のパートナーとして、新しい役割を担い始めてくれたら、と夢見る。次の世代を生きる若人の心に灯をともしせるものになり得たら、と夢見る。自分の分身とも言える文筆が、これからの未来を生きる若人の糧となり得たら、と夢見る。できることなら、文理の融合によって紡ぎ出された精神力と行動力で、この先の将来に、さらに良き人格に富んだ文筆を残せることを。これからも、医業から文筆を想い、文学の視点から医療を考え、自分なりの特性で、地域医療に貢献できることを。そう思える仕事を続けたい。

ありがたいことに、この還暦記念号の随筆集は、福島民報社の取材も受けた。記者の丁寧な取材で、良き記事にさせていただいたことに深謝だ。新聞に出た、その日の朝に、病院広報課にも多くの問い合わせを頂戴した。改めて、その新聞を手にして紙への愛も感じた。掌は心に通ず。周囲への敬意と深謝が心に湧く。

かように、自分が何か祝ってもらいたいと思うのではなく、こちらから、今を迎えられたことに感謝と讃仰を捧げたいという願いが、今の一番の気持ちだ。

医師会報99号。かつての会報も読んで、頷き、微笑み、触発され、私の成長に大きな意味を持ったことを実感する。そういえば、野球の背番号99。これは、育成選手の番号である3桁に近いことから、育成選手の気持ちを忘れず這い上がるという思いをこめて、不屈の精神を持つ選手が背負う番号とも言われている。中日時代の松坂大輔投手もつけていた。連綿不断。点滴穿石。活動できる体力、楽しめる脳、があるうちに、私もなお、上には上があることを知って、頭の回転を鈍らせず、良き境涯を積みみたい。

人類の歴史は、その時その時を、情熱を持って直向きに生きた人たちの、個人史の集積であろう。先に心配や不安もあるが、それが起きた時の具体策や対処法を準備しておいて、それを確かな老

い仕度としたいものだ。これまでの蓄積に感謝し、生あることに感謝し、感情の動きを抑制せず、心の老化を防ごうと思う。

折も折、今年、郡山市政施行100周年を迎える。1924年に、郡山町が小原田村と合併し、全国で99番目の市になったことが起こり。明治時代は寒村だった地域が、安積疏水や鉄道の開通などで飛躍的に発展し、その後、近隣12町村と合併して、

現在の郡山市になった。

この時、医師会報の次号は100号。これも慶事。医業や文筆や社会奉仕。及ばずとも、この地域を守れる人の一人になることを目標に。

華甲を迎え、僭越ながら、これまでの恩返しを胸に、声望を得て、僅かばかりでも、郡山市と郡山医師会の、さらなる発展に寄与できることを念ずる。

